

## 大溝城下の地域構造とその特質

### 一 はじめに

現在の都市の中で、旧城下町にその源流をもっているものが、陣屋町を含めて総数四五二ある<sup>1)</sup>。しかし、それらの町も大半が近代都市として生まれ変わり、一部の都市で観光資源としてその面影を残しているに過ぎない。そうした城下の景観を残す町を訪ねると、おおよそどの町も独自の町並みが存在するとともに、その反面、共通の画一化された町並みも見いだすこととなる。これは城下町という封建時代の都市が、それぞれ同じ政治的意図で計画的に建設され、封建的諸制度のもとで構築されたという理由によるものであることは周知の事実である。

近江の場合も、そうした城下町の系譜を引く都市が存在する。大津（膳所）をはじめ彦根、長浜、近江八幡などである。大津のような複合都市は別としても、彦根、長浜、近江八幡などでは、城郭とともに城下町であったことを町の活性化に大きく取り入れ、観光の資源としても活用している。その町並みを見ると、いずれも白壁の武家屋敷群とともに寺町、町人町、人工的に施された街路などの画一的な構成が目に入る。これは先に述べた同じ社会背景の上

に、いずれの町も琵琶湖に面した地理的条件が共通の条件として存在したためである。

このことは、近江の城下町に限らずとも同様のことである。ただそうした中での独自の景観は、その城下が持ち得る領国内外への中心性とともに、流通経済的要素による活況の度合い、すなわち城下に加えての複合的要素によって若干の差異がみられる程度である。例えば、今までに分析を試みた五万石規模の美作の津山城下<sup>②</sup>・播磨の龍野城下<sup>③</sup>では、いずれも内陸部の城下として、それぞれ吉井川・揖保川を町造りに取り入れ、さらにそれらを利用することによって、周辺地域と密接に結びつき、ある面では独自の町造りが行なわれていた。

そこで同じ琵琶湖に面し、位置的には湖西に立地する唯一の城下である大溝について、非常に小藩であるがその地域構造がやはり共通の要素からなり、どのような特質がうかがえるのか少しみてみることにする。

なお、大溝城下については高島町史編さんの過程で多くの史料が新たに採訪でき<sup>④</sup>、『高島町史』をはじめ、すでにその歴史の変遷や士庶居住地域の比較など分析・紹介を試みている<sup>⑤</sup>。それらをもとに大溝城下の地域構造やその特質について整理していきたい。

## 二 大溝城下の成立と展開

大溝は、近世にはわずか二万石の城下であり、地理的に近江盆地という内陸部であるとはいえ琵琶湖に臨む位置にあつて、織田信澄の築いた大溝城は琵琶湖を取り込んだ形で構築された水城であつた。また、城下も河川・運河などによって海浜と結ばれたものではなく、琵琶湖に臨む、むしろ臨海(湖)の城下といった位置付けのほうが望ましい。

大溝城下の起源は天正六年（一五七八）織田信澄が養父磯野員昌の跡を継ぎ、信長によって高島一郡が与えられて、新庄城（新旭町）から大溝に移り、城を築くと同時に町造りを行なったことに始まる。この時の町造りは琵琶湖の入江であった洞海（乙女ヶ池）に築かれた水城を中心に周囲に侍町を、さらにその西と北に町屋を配した。これらの町は信澄が新庄や南市（安曇川町）から移転させて形態を整えたと考えられる<sup>⑤</sup>。およそ、この時期に近世を通じての大溝城下の根幹が形作られたと考えられ、さらに現在に至るまでその町割りが生き続けているのである。

その後、元和五年（一六一九）八月に、伊勢国安濃郡から分部光信が入封するまでの約四〇年間、秀吉の直轄領をも含めてめまぐるしい領主の交替をみた。しかし、その間の慶長八年（一六〇三）には、大溝城を取り壊して甲賀郡水口城建設の資材として流用され、大溝城下のシンボルともいえる城郭が取り払われた<sup>⑥</sup>。高島・野洲郡の所領を与えられた分部光信は、天守のない大溝の城下へ入り、信澄時代の三ノ丸に陣屋を築き入封した。そして、信澄の造った城下の整備・拡張に着手したのである。そうした領主の変遷や城下の整備・発展については、『高島町史』などに詳述されているが、城下の発展とともにその地域構造がどのように整備されていったのか、少し整理しておこう。

大溝城下は、分部光信の入封後、信澄の築いた城下を踏襲しつつ次第に整備・拡大されてきた。陣屋を中心にして、西方山手の石垣村に家臣の武家屋敷を配し、また伊勢上野から転居した職人や商人の居住を従来の町屋地域を拡張して認め、同業者町も設定した。と同時に水路や街路の整備にも着手して、武家屋敷と町屋地域を水路をもつて区別するなど、軍事・経済の両面を備える近世的な城下に整えられていったのである。分部光信が構築した陣屋は、もちろん光信の居宅であるとともに、そこが政庁でもあって、陣屋は内濠がめぐらされ郭内と呼ばれていた。郭内の周囲には武家屋敷が配置され、それらは外濠によって囲まれていた。さらに、これらの地域には石垣・土塁をめぐらし

て惣門を設けた。この郭内を含む外濠内を惣郭（曲輪）と称した。この惣郭は東西四町余り、南北二町余りの地域を占め、惣郭内には、縦通りにあたる東西通りに、北町・中町・南町の三通りが、また横の南北通り・東町通りがそれぞれ設けられ、各武家屋敷の周囲には、植木が植えられていた。さらに惣郭の東側には、現在もその遺構を残す長屋門の形式をもつ惣門が、他の個所には西門・南門・会所門がそれぞれ設けられて、惣郭と町屋が明確に区別されたのであった<sup>⑧</sup>。ここに近世城下の特色のひとつである土庶居住区域の確定がなされた。まさに近世の社会背景である身分制度を平面上に置換したものであるといえよう。

郭内に構築された陣屋は方形の構造で、東側に大溝城が付随するという形態をとっていた。その陣屋の規模は、本丸が東西三〇間（約五四メートル）・南北三二間、二ノ丸が東西九二間（約一六五・六メートル）・南北二九間、そして陣屋の置かれた三ノ丸は、東西四六間（八二・八メートル）・南北六〇間であった<sup>⑨</sup>。

町屋地域では、「大溝旧図」にその位置が示されているように<sup>⑩</sup>、南北十一町（約一二八〇メートル）・東西約三ノ四町（約三三〇メートル）の四〇メートルで南北に細長く形成された。湖岸よりから本町通り・中町通り・西町通り・石垣通りという南北の四筋を中心に二〇ヶ所から形成されていた（図）。

また織田信澄の築いた大溝城、城下および分部氏の大溝陣屋、城下の建設については、とりわけ注目される史料がうかがえる。信澄の大溝城および城下建設の大工仕事については、当時、築城作事方大工棟梁となった村谷家の「口上書」<sup>⑪</sup>に「織田七兵衛様、高嶋郡御知行之時、大溝御取立被遊候砌、私先祖村谷次郎左衛門<sup>江</sup>、御城内御城下共、家作事方之大工棟梁被仰付候」とあり、大溝城下近村の音羽村に居住する大工村谷次郎左衛門を大工棟梁に、郡内の大工を動員して大工作事を進めていったと考えられる。また、分部氏の陣屋建設に際しても、同じく音羽村の村谷家

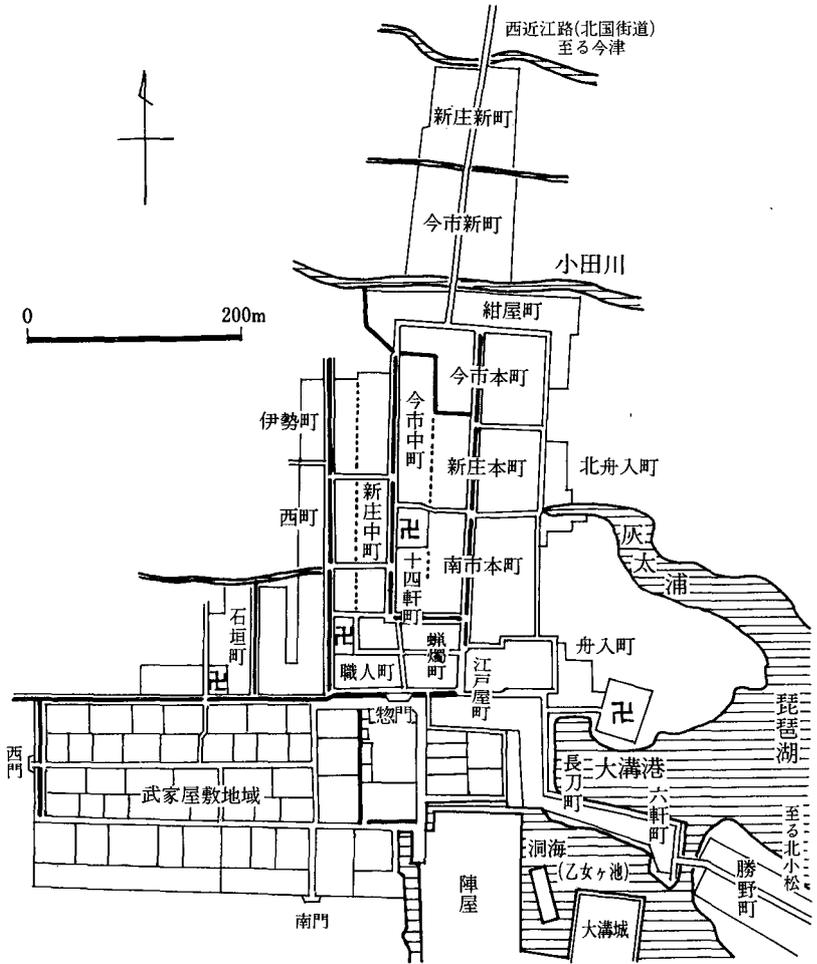


図 大溝城下の地域構造 (享保期)  
 [享保17年「大溝旧図」(横田三千太郎氏所蔵)により作成]

が座敷・長房・高塀・御殿の改修工事を請負った「御普請注文」書が残されており<sup>②</sup>、村谷嘉右衛門という大工棟梁が関与していたことがわかる。

### 三 大溝城下の地域構造

まず大溝城下の武家屋敷地域についてみてみる。分部氏の家臣について、その数は正保・慶安期（一六四四～五一）、つまり分部光信が入部して約三〇年を経た時期に、一五一名が「勢州御普代慶安年中諸士以下由緒書」に分部氏の家臣としてあげられている<sup>③</sup>。しかし、別の史料では元和五年（一六一九）の大溝城下の武家屋敷地域の様子を示す絵図が残っており<sup>④</sup>、惣郭内に四五名の屋敷割が記されている。なお、家臣団の構成等については、鎌田道隆氏の「大溝藩の家臣団構成と財政」（『奈良大学紀要』一七号）に詳述されているのでここであらためて取り上げる必要はないと思われるので、ここでは武家屋敷地域という平面に限ってみることにしよう。

先の元和五年の「家中屋敷割図」によれば四五軒が記されており<sup>⑤</sup>、それはいずれも知行給が一〇〇石から三五〇石取程度の者であった。さらに、廃藩時の武家屋敷地域を描いた図によれば、元和五年に四五軒が記されていた部分には四二軒が、さらに陣屋の北側部分に四軒が記され、居住地域に若干の移動がみられている<sup>⑥</sup>。しかし、その範は分部氏入封当時に整備した惣郭内に限られたものである。ただ、ひとつ注意しなければならないのは、織田信澄の建設した城下では分部氏時代の城下の武家屋敷地域の西側に下級武士の居住地域である足軽町が存在していたが、分部氏の城下ではそうした下級武士の居住地域の明確な記載がないことである<sup>⑦</sup>。確かに近世になって城および城下そのものに、軍事的要素が薄れたとはいうものの、先の家臣団一五一名という数字の中には、二〇石取以上の知行給は三

分の一ほどであり、残りは現米給の下級武士であったと考えられている。

それでは、これらの下級武士層の居住していたのはどのあたりだったのだろうか。享保一七年の「大溝旧図」によれば<sup>⑮</sup>、伊勢町をはじめ石垣町・西町などに御家人の屋敷割がみえる。伊勢町などは分部氏の前封地の地名を付したもので、領主分部氏とのゆかりの深い町名である。いずれにしても分部氏が伊勢の地からこの大溝へ移るときに連れてきた家臣のなかで、一部の上級家臣を除き下級の家臣については、町屋地域に居住していたことがうかがえる。

次に、町屋地域についてみることにする。町屋地域については享保一七年（一七二二）改の「大溝旧図」が残されており<sup>⑯</sup>、当時の城下の様子を端的にうかがわせてくれる。

図のように城下そのものは南北に細長く伸び、城下を通過する西近江路（北国街道）に沿って発達した街村状の町場であった。南から街道を北上してくると勝野橋（欄干橋）の手前両側に勝野町、そして橋を渡って城郭の東側に六軒町・長刀町・江戸屋町と続く。また、惣郭の北側の通りに面して職人町。その辺りから北へ街道を含めて四本の通り、すなわち湖岸寄りから本町通り・中町通り・西町通り・石垣通りがあった。それらの通りを中心に本町通りには南から蠟燭町・南市本町・新庄本町・今市本町が、中町通りには南市中町・新庄中町・今市中町が、西町通りには西町・伊勢町、石垣通りには石垣町がそれぞれあった。本町通りには小田川の手前で西に屈曲してさらに北上しており、今市新町・新庄新町が続いていた。東西の通りには、本町通りと中町通りを結ぶ十四軒町、北端には紺屋町があり、本町通りから大溝の港を結ぶ通りには北舟入町があった。

このうち南市本町あたりは、武家屋敷地域と町屋地域の接点である惣門にも近く、また大溝港にも近い位置にあったため、松本豊寿氏や豊田武氏という町屋シビックセンターを形成していたと考えられる<sup>⑰</sup>。この町屋シビックセン

ターというのは、城下の大手筋で街道の通過する交通の要衝に位置し、領国経済流通の拠点となる地域のことである。これは絵図の上からも容易に推測が成り立つが、さらにこの南市本町が町屋シビックセンターとして機能していたことは、同町の「町内諸要記」などの記録類に見える職業記載や<sup>2)</sup>、そのほかの記事によって裏づけられる。そして、今日の機能分析などによってその地位が継承されていることも明白である<sup>3)</sup>。いわば城下での最も繁華な地域で、さらには領国経済の中核であったといえるのである。

さらに、この「大溝旧図」からは二〇ヶ町の具体的な屋敷割りをもうかがうことができる。二〇ヶ町のほとんどが通りをはさむ形で両側に位置する町屋を一区画とした両側町であり、短冊型の屋敷割りがなされていた。それぞれの町屋は、多くが間口三〜五間、奥行二〜一五間程度のものが多く細長い長方形の町屋であった。「大溝旧図」の中から屋敷割りに間口の間数が記されているものを整理すると表1の通りである<sup>4)</sup>。全体的な傾向として本町通り、つまり街道に面した町屋では屋敷割りの規模も大きく間口一〇間余・奥行二〇間近くといった町屋も見受けられ、富裕町人の居住もうかがわれる。とりわけ南市本町の福井家・新庄本町の中西家などは、織田信澄時代には有力被官であり、分部氏時代にあっても大溝町の年寄分としての役割にあつたため、広大な屋敷地を持ち得ていた。また、北辺の今市新町・新庄新町では、間口・奥行ともに画一的でまさに為政者が計画的に構築したものであることを物語っているよう。

寺院は、勝安寺・妙琳寺・流泉寺などの五ヶ寺でいずれも惣門からほど遠くない位置に存在した。これは他城下のように軍事的意味を持たせた寺町という形での寺院の集住は企図しなかつたまでも、そうした要素は少なからず保持しているように思われる。それは寺院の立地する位置が陣屋部から程遠くないところであつたことから推測でき

表1 「大溝旧図」にみる町屋の規模（享保17年=1732）

町名	軒数 (間数記載分)	3間 以下	3間 ～	4間 ～	5間 ～	6間 ～	7間 ～	8間 ～	9間 以上
勝野町☆	25 (25)	1	—	3	11	3	—	2	5
六軒町☆	5 (5)	—	—	3	1	1	—	—	—
長刀町☆	17 (17)	—	1	7	2	3	—	1	3
江戸屋町☆	16 (8)	—	2	3	2	—	1	—	—
蠟燭町☆	6 (6)	—	—	3	1	1	—	—	1
職人町	11 (11)	—	1	4	2	3	—	—	1
石垣町	12 (12)	—	—	1	2	7	1	—	1
南市本町☆	21 (12)	—	3	3	2	—	1	—	3
十四軒町	8 (8)	—	4	2	—	—	1	1	—
南市中町	13 (13)	—	9	3	—	1	—	—	—
西町	48 (40)	1	14	18	5	1	—	1	—
今市新町	24 (24)	—	6	12	2	2	1	—	1
新庄新町	24 (24)	1	2	18	2	1	—	—	—

「大溝旧図」（『横田三千太郎家文書』）で、表間口の間数の記載のあるもののみについて整理した。

☆印を付した町名は西近江路沿いの町名である。

る。

また、長刀町には「御会所」があり、ここは町の支配を実際に担当する町役人の執務した役所であり、元文二年（一七三七）には「制札場」が江戸町屋と石垣町の二ヶ所にあつたことも知られている<sup>23</sup>。

城下の構成要素としてはおおよそ以上のようなのである。

その他、この大溝城下において特徴的であるのは、さきの「大溝旧図」にも描かれているが、城下の通りの中央を幅一メートル、深さ一メートルほどの石垣水路が走っていることである<sup>24</sup>。これらは従来、堀割を利用して町屋に引水していたのを城下の町割りの整備とともに四つの水路に改修したもので、飲用・防火のための生活用水であった。そのため城下の町屋は井戸を持たず、江戸中期以後は城下の西方の湧き水地帯に元井戸を掘って水をため、そこから竹樋を地中を通して町屋に水を通すようになったといわれている。この

ため引水を通して町の中に五人組や井戸組・とゆ仲間などの共同体も生まれている<sup>26</sup>。一方、下水道の方は町並みの裏手に裏川が敷設されて背戸川に合流、琵琶湖に流入したとされている。

最後に、城下の地域構造の特色のひとつでもある同業者町について少し触れておこう。近世に成立をみる城下町は、同職同業者の地域的集住がみられ、それぞれが職業名や商品名、あるいは商品の取引先名・職人商人の出身地名などを町名に、町共同体を構成する場合がよくみられる。それは同職同業者の利益の安定が背景にあったとともに、一方で城下の職人・商人の支配と統制といった領主側の要請によるものでもあった。

織田信澄の構築した城下では、ただ一つの「職人町」が存在しており<sup>27</sup>、どのような職種の職人の集住がなされていたのかは明らかでない。ただ、勝野町と打下村の大工所をめぐる争いが見受けられることから<sup>28</sup>、大工職人の存在は確認でき、さらに一般的な鍛冶職人・細工職人などの存在・集住が推測される。慶長七年（一六〇二）には「大溝・打下村検地帳」に、上職人町・下職人町の記載があり<sup>29</sup>、職人が数多く居住していたことを物語っている。また、分部氏は伊勢からの入封に際して職人を移住させて、惣門の北に職人町を造った。「大溝旧図」によれば、職人町以外にも同業者町がみられ、紺屋町・蠟燭町・舟入町が職人商人町として存在した。さらに江戸中期ごろからは醤油・酒などの醸造業や絞油業なども成立し、南市本町辺りに集住したとも推測される。寛政元年（一七八九）の「町方心得申渡覚」によると<sup>30</sup>、「当町酒屋敷之事七軒」と記され城下に酒造仲間や、油屋・豆腐屋仲間の存在も確認できる。なお、西近江路沿い（国道一六一号線沿い）のこの地域は、今日でもその面影を残す商家が立ち並び、城下時代の機能を引き継いでいる。

表2 大溝城下の人口

年代 (西暦)	戸数	人口		男女別人口		出典
		人	人	人	人	
宝暦7年 (1757)	286	1,039		男513	女513	『磯野家文書』・『中村穰家文書』
天明8年 (1788)	277	1,026		男570	女618	『福井芳郎家保管文書』 『大溝町明細帳』
寛政元年 (1789)	272	1,026		男513	女513	『福井芳郎家文書』 『町方心得申渡覚』
天保9年 (1838)		1,188				『磯野家文書』・『宗旨改中日記』
明治初年		1,970				矢守一彦『幕藩社会の地域構造』表86

#### 四 領内人口と城下人口

先に大溝城下における地域構造についてみてきた。一般的に城下は、近世の封建社会を平面に置換したものであるという点は周知のことであるが、大溝城下にあつても小藩ながらそうした点は根底に貫かれており、だいたいにおいて大・中藩の城下と大差のない地域構造であつた。そこで次に、そうした画一的に構築された近世城下町における人口構造によって、大溝城下の地域構造の特質をうかがう手がかりとしたい。

大溝城下に居住する人々の構成は、まず城主である藩主、そしてその家臣である武士、当然のことながらその家族がいる。さらに商人・職人などの町人、僧侶などが城下で生活をしてきた。残念ながらこれら城下全体の人口を推測できる史料がないため、数字的にとらえることができる町人人口についてのみみることにする。表2は城下の町人人口を宝暦七年(一七五七)、天明八年(一七八八)、寛政元年(一七八九)、天保九年(一八三八)と明治初年についてみたものである。男女比率・戸数のわかるものについては同時に上げておいた。表からは明治期を除いておおよそ一〇〇〇余人程度の人口であつたことがうかがえる。これは明治期の数字が士・華

表3 大溝城下南市本町の生業

安永2年5月(1773)	天明4年11月(1784)
南部かせぎ(2軒)・津軽かせぎ・朽木問屋・糶屋(2軒)・酒屋・醤油屋・見世商(3軒)・茶屋・菓子屋・郷宿(3軒)・御屋敷奉公・大工・百姓(3軒)請作百姓・日雇(4軒)・医者・隠居	南部かせぎ(2軒)・津軽かせぎ・糶商売・酒商売・醤油屋・米屋(2軒)・肥し物屋(2軒)・菜種油屋・干物屋・菓子屋・硯商売・荒物屋(2軒)・質屋・古手屋・瀬戸物屋・郷宿(4軒)・賃仕事・手習謡師匠・百姓(3軒)・下作百姓・日雇(2軒)
28(戸数17戸)	31(戸数15戸)

「町内諸要記」(『福井芳郎家保管文書』)により作成。

・卒族を含み、すなわちもとの武家人口をも含む旧城下全体の人口と考えられるために差異が生じているのであろう。

次に、城下の人々の生業についてみる。寛政元年の「町方心得申渡覚」によると①、ここ大溝城下の「渡世之事」として「南部津軽江商参り候者少々御座候、其外京・大津・大坂より諸色買來村方江売申候、又朽木より炭木出候を買、方々江商申候」と記されている。つまり、京坂や大津から各種物資を仕入れ、村方へ販売したり、南部・津軽の物産を日本海経由で商うもの、朽木より炭木を運んで売りさばくものがあるということである。

さらに具体的にみると、南市本町の場合、安永二年(一七七三)五月と天明四年一月の家職が「町内諸要記」に記されている②。それを整理したのが表3である。いずれの場合も酒屋・醤油屋・糶屋・郷宿などが記されており、また戸数に比較して職種の多さからは、兼業が多かったことを物語っている。たとえば、三四郎が醤油・質・古手・米・肥し物・百姓の六種、九兵衛が郷宿・米・瀬戸物・肥し物の四種など一軒で多くの兼業をしているものもあった。また、表中の南部・津軽稼ぎというのは、今日でいう総合商社である小野組の關係である。

そして、百姓の記載がいずれの場合も四軒あることからすれば、大溝城下

が比較的農村に近い位置にあったと推測される。単純に農業者の存在を農村に結びつけるのは早計であるといったそしりは免れ得ないと思うが、これから触れる領内人口と城下人口の係わり、さらには城下の経済的位置などを鑑みても、そうした推測は容易に成り立つのではなからうか。

先ほどみてきた城下人口に再び戻ってみよう。領内人口と城下人口の関係については、小野均氏<sup>⑧</sup>をはじめ関山直太郎氏<sup>⑨</sup>・矢守一彦氏<sup>⑩</sup>などによってすでに分析が進められているところである。そこでそうした研究成果に基づいて大溝城下の場合を少し紹介しつつ、これも大溝城下の地域構造の特色を探る手がかりとしたい。

関山氏の『近世日本人口の研究』などによれば<sup>⑪</sup>、江戸時代における人口と石高の正比例関係は早くから指摘されているところである。さらに矢守氏は『幕藩社会の地域構造』のなかで<sup>⑫</sup>、小野氏の「新城下町の人口集中範囲をみるに、大体に於て領主権の及ぶ範囲に過ぎない」といった点をも含み、所領の石高と領内人口はほぼ正比例し、したがって領内総人口と城下町の人口規模との間にも、ほぼ正比例関係の成立が予測されると言及している。また、この相関関係には当然のことながら例外もあることを指摘している。これらの例外の事例については、いちいち紹介する余裕がないので省略する。

大溝藩の場合、近世の領内総人口を城下人口とともに比較できる史料が残っておらず、再び矢守氏の『幕藩社会の地域構造』に取り上げられている表86の「城下町人口と領内人口」の分析を利用する<sup>⑬</sup>。他城下とともに大溝城下の人口構造についてまとめたのが表4であり、彦根・水口・大溝・篠山・三田の場合は領内人口の割以上が城下人口となっている。これは矢守氏のいう「城下町の人口規模と所領石高との相関関係」からすれば、石高に比較して幾分か城下集住人口が多くなっている。また、その理由としては「城下町四囲に有力な経済都市をもたなかったため」とい

表4 城下町人口と領内人口

城下名	石 高	①領内人口	②城下人口	②/①	華・士・卒族	平民・その他
		万人	人	人	%	%
彦根	25.5	189,954	24,368	12.8	3.8	96.2
水口	2.5	21,768	4,914	17.9	7.1	92.9
大溝	2.0	12,461	1,970	15.8	4.3	95.6
園部	2.6	35,828	2,651	7.4	5.2	94.8
篠山	6.0	58,735	5,931	10.1	6.2	93.8
豊岡	1.5	19,036	4,926	25.8	4.2	95.8
三田	3.6	21,898	2,331	10.6	6.2	93.8
高槻	3.6	54,928	4,281	7.8	4.4	95.6

矢守一彦 『幕藩社会の地域構造』(昭和45.大明堂)「表86城下町人口と領内人口」より抜粋。

う点が指摘されている<sup>⑩</sup>。大溝城下の場合は、周囲に流通経済の要素を持ちうる都市(町場)がなく、南は小松・木戸、北は河原市・今津の宿駅の存在をみる程度であった。しかし、これらの宿駅も湖東にあった東海・中山両道の宿場町が、いずれも多くの人々の往来と近郷農村の中心的位置を占め、ある程度の人口集住と流通経済の機能を兼ね備えていたのに対して、湖西のそれは人々の往来も余り多くはなく、また周辺農村の在郷町として流通経済機能を持ち得るだけの要素が備わっていなかったのである。つまり大溝藩の高島郡内の所領にあって、大溝城下は都市的要素を持ち得る唯一の町場で、城下への人口集中度が比較的高かったと考えられる。

では、ここでもう一度大溝城下の地域構造そのものにふりかえって、武家屋敷地域と町屋地域の面積比率についてみておこう。

表5は城下町の武家屋敷地域と町屋地域の面積比率について整理したのである。この表も、先の矢守氏の研究成果を利用することとする。『都市プランの研究』にある「侍屋敷地区・町屋地区の面積構成比率」の表を抜粋した<sup>⑪</sup>。なお、大溝城下については享保一七年「大溝旧図」および武家屋敷地域を示す郭内図などをもとに現況比定を行ない、面積測定機で測定した数値を入れた。七城下中四つの城下で武家屋敷地域と町屋地域の比率がほぼ七対

表5 城下町の武家屋敷・町屋地域の面積比率

城下名	石 高	①町屋面積		②武家屋敷面積		①+②	
		町	畝	町	畝	町	畝
彦 根	25.0 万石	52	26 16 (39.0)	82	02 29 (61.0)	134	29 15
亀 岡	5.0	23.	41. 08 (74.5)	8.	02. 03 (25.5)	31.	43. 11
園 部	2.6	10.	45. 15 (66.7)	5.	24. 03 (33.3)	15.	69. 18
福知山	3.2	13.	85. 08 (46.1)	16.	24. 21 (53.9)	30.	09. 29
篠 山	6.0	23.	79. 23 (37.6)	39.	49. 02 (62.4)	63.	28. 25
柏 原	2.0	11.	47. 22 (63.9)	6.	48. 13 (36.1)	17.	96. 05
大 溝	2.0	15.	42. 23 (70.0)	6.	73. 02 (30.0)	22.	15. 25

矢守一彦 『都市プランの研究－変容系列と空間構成－』（昭和45.大明堂）  
 第2編「表2-3 諸旧城下における侍屋敷・町屋地区別の面積および地価一覧」より抜粋。  
 大溝城下については、享保17年「大溝旧図」（『横田三千太郎氏所蔵』）および武家屋敷  
 地域を示す郭内図など（同氏所蔵）によって現地比定を行ない、それを面積測定機で測定し  
 た数値を使用した。

三の割合となり、大溝城下の場合、まさにその七対三という比率を示している。この七対三の割合は、矢守氏の分析からでてきた「概ね侍屋敷七割、町屋三割」の比率に合致するものである。また、領主（これは武家屋敷の面積比率）と石高との相関については「概ね正の相関を示し」ていることからすれば、二万石の大溝城下の場合では武家屋敷地域の面積比率が二割程度で、これは先に述べた七対三の割合からすれば矛盾が生じることとなる。武家屋敷地域の面積が幾分多く、こうした傾向のみられる一般的理由としてあげられるのが政治都市的性格が強い点である。そこで大溝城下の場合には石高に比べて多くの家臣を抱えていたか、もしくは家臣一戸当りの屋敷地面積他城下に比較して広大であったという推測が成り立つであろう。

ではいままでの分析で、大溝城下への人口集中度が高い点や、面積比率で政治都市的性格が強いといった点に、城下そのものの地域構造を加味して大溝城下の

地域構造の特質をまとめておこう。

## 五 ま と め

今まで大溝城下の地域構造についてみてきた。大溝城下は小藩でありつつもその地域構造は、近世城下としての共通の構成要素からなり、根底には近世社会における封建的身分社会が貫かれていた。また、城下の成立は織田信澄の時代に求めることができ、のち分部氏の時代になって整備・拡充がなされた。分部氏の時代の城下は武家屋敷地域を除き、町屋地域にあつては享保一七年の「大溝旧図」が残されており、当時の様子が端的にうかがうことができる。それによれば、町屋地域は二〇ヶ町からなっており、道路をはさんで両側から一町の共同体を形成する両側町であった。屋敷割りは短冊型のもので一町が一〇戸から二〇余戸程度で構成されていた。

さらに人口構造をみると、近世を通じて町人口はおよそ一〇〇〇人程度で、これに武家人口を加えて領内人口のほぼ一割五分が城下居住人口と考えられている。これは城下への人口集中度が比較的高く、石高などの相関関係を見ると城下周辺の経済都市（都市といわずとも町場）の未発達を指摘することができる。

また、武家屋敷地域と町屋地域の面積比率をみると、一般的傾向がそのままではまるといった形態を取りつつも、一割程度の武家屋敷地域の面積過多を示している。このことは町屋地域の面積過多が、経済的に領国の中心機能を備えているということとは逆に、そうした点の未発達と政治的都市の性格が強い点を指摘することができるのである。そして武家屋敷地域と町屋地域の面積比率が三対七という数字は、家臣数の多さ、もしくは家臣の屋敷一戸あたりが広大であったことを物語るものである。しかし、現在にまでその遺構を残す武家屋敷（笠井家）や、武家屋敷地

域全体の遺構をみても、さほど広大であるとはいいがたく、むしろ他城下に比較すれば狭少であったと思われる。ということは家臣数の過多ということが考えられるが、この点についてはさらに分析が必要であろう。逆に、町屋地域にあってもその面積が狭少であったという点も指摘できないわけではない。町屋地域がさらに広大な面積であれば、当然のことながら武家屋敷地域の比率は低くなるわけである。この点では、大溝城下の町屋地域で領国の流通経済的核となる町屋シックセンターの機能が未熟であったこともその一因であると思われる。

この大溝城下が、古くから勝野津として栄え、近世に引き継がれる大溝港を城下内に擁する港町を兼ねており、その機能を十分に活用できていれば、より城下にインパクトを与えたであろう。そして、町の景観についても街村状ではなく、団塊状となって経済的地位の向上に結び付いていたのではなからうか。近世初期に豊臣秀吉が若狭からの荷物を今津に独占的に集中させたことによって大溝港の位置が低下したため、大溝港は近世においては大半が薪炭の積み出し港となってしまった。そのため水陸の結節点でありつつも、十分な機能は発揮できず、その繁栄は期待されただけではなかった。もう一点、大溝城下の周囲に町場の発達がみられず、領国内での流通経済の拠点として活用が図られなかったことも城下の町屋地域の発達を阻む一つの要因ともなったと考えられる。これらの点が十分に克服されれば、さらに町屋シックセンターの活況が期待され、町屋地域も、より広範囲に拡大・発展していたことであろう。

これは、高島商人が東北地方において広く活躍していたことから、城下における経済状況の一端が垣間みられるのである。

## 註

- (1) 藤岡謙二郎編『地形図に歴史を読む』第四集(大明堂、一九七二) 一三二頁
- (2) 拙稿「城下町津山の発展と吉井川舟運」、『史朋』一八号、一九八一
- (3) 拙稿「龍野城下の構造と揖保川舟運」、『仏教大学院研究紀要』一二号、一九八四
- (4) 昭和五年より高島町史編さんが本格化し、幸いにも筆者も史料調査のお手伝いや執筆の機会が与えられ、そうした中で新たな町方の史料が発掘できた。今回利用させていただいた横田家・磯野家などの史料もそのうちの一つである。なお「高島町史」は高島町から、一九八三に刊行された。
- (5) 拙稿「大溝城の変遷」(高島町文化財資料集四、一九八四)。拙稿「土席居住地域の比較にみる大溝城下」、『近江地方史研究』第二四号、一九八八
- (6) 福井清家文書「織田城郭絵図面」、妙琳寺文書
- (7) 『近江蒲生郡志』卷三、(蒲生郡役所、一九二二)
- (8) 横田三千太郎家文書「城下町絵図」・「家中屋敷絵図」
- (9) 笠井家文書「陣屋図」
- (10) 横田三千太郎家文書「享保十七年 大溝旧図」
- (11) 村谷清家文書。なお、この村谷清家文書については、藤田彰典・八杉淳「近江国高島郡の大工仲間史料」(上)・(中)、
- 『史朋』に収録した。
- (12) 前掲(11)
- (13) 長野家文書
- (14) 前掲(8)
- (15) 横田三千太郎家文書
- (16) 前掲(8)
- (17) 前掲(6)
- (18) 前掲(15)

- (19) 前掲(15)
- (20) 松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究』(吉川弘文館、一九六八)。豊田武『日本の封建都市』(岩波書店、一九五二)。
- (21) 福井芳郎家文書。この「町内諸要記」は、南市本町の町代の公用日記で、内容は幕府の法令や藩の回達の写し、その他、日常の出来事などが記されており、非常に興味深いものである。
- (22) 現在も高島町域の中心商業地として、また数年前までは役場などの行政機能を持ち、城下時代の町屋シビックセンターとしての地位を保持している。
- (23) この絵図においては、「一間六分之割」と縮尺が記されており、表1のようなおまかな分類ではその傾向を示すことも可能であるが、間口間数記載分のみでもある程度の傾向はうかがえる。また、縮尺については、その精度に若干の疑問も残されているため、この点については後考を待ちたい。
- (24) 打下区有文書
- (25) この水路は、現在も残っており、当時の状況を物語ってくれる。今後もこのままの形で保存・継承がなされることが望まれる。
- (26) 横田三千太郎家文書「静脩堂見聞控」。この五人組・井戸組などの共同体は、元井戸や竹樋などの管理にあたった。
- (27) 前掲(6)
- (28) 前掲(11)
- (29) 前掲(24)
- (30) 福井芳郎家文書
- (31) 前掲(30)
- (32) 前掲(21)
- (33) 小野均『近世城下町の研究』(至文堂、一九二八)
- (34) 関山直太郎『近世日本の人口構造』(吉川弘文館、一九五八)
- (35) 矢守一彦『幕藩社会の地域構造』(大明堂、一九七〇)、『都市プランの研究』(大明堂、一九七〇)
- (36) 前掲(34)二二頁以下

- (37) 前掲(35)、二四五頁、
- (38) 前掲(35)、二四九頁、表八六より
- (39) 前掲(35)、二五一頁
- (40) 前掲(35)、二九七頁、表二二三より
- (41) 前掲(35)、三〇二頁

本稿は、一九八八年五月の歴史地理学会において口頭発表したものに、修正を加えたものである。また、最後になったが、史料の閲覧をご快諾いただいた所蔵者の方々、および公務多忙の中、史料の閲覧に關しましてご配慮、ご指導を賜った高島町歴史民俗資料館の白井忠雄氏に対し、ここに拝謝申し上げる次第であります。